

誰かの記憶を辿ることで、わたしたちはどんな“私”になれるのか

その記憶を受け取ることで、自分がどんなふうに変われるのか

アサダワタル（文化活動家、アーティスト、「想起の遠足」ディレクター）

×

高橋伸行（アーティスト、名古屋造形大学教授、やさしい美術プロジェクトディレクター）

・日時：2017年11月17日19:00～

・場所：「想起の遠足」インフォメーションセンター
（東京学芸大学こども未来研究所 Codolabo studio）

■誰かの記憶と、出会うということ

アサダ●こんばんは。今日から3日間にわたって開催される「想起の遠足」のオープニングとして、名古屋造形大学教授で、「やさしい美術プロジェクト」などをディレクションしておられるアーティスト、高橋伸行さんをゲストに迎えたプレトークを始めたいと思います。その後は、私たちの屋台「のはらくん」を引っ張って、「夜遠足」に繰り出します。会場には、今回の遠足の企画に参加してくれたメンバーもたくさん来ていただいているので、みなさんのお話もうかがいながら、このトークを進行できればと思います。

今回の「想起の遠足」は、“記憶とまち”が大きなテーマとなります。昨年は「想起のボタン」と題して、身近な生活の記憶をテーマとした作品をつくり、武蔵小金井駅前の市民交流センターで展覧会を開催しました。制作では、子育ての記憶、いつも通っている駅のこと、夕方になると鳴り響く時報の音楽、地域を流れる野川や武蔵野公園のくじら山のこと……といったように、小金井に住む人たちの個人的な生活の記憶から作品をつくることで、教科書的な小金井市とは違う、一人ひとりの記憶が集まってできている小金井の町を実感してみたいと考えていました。その過程で、それぞれの思い出を語り聞いたりしながら、語り手と聞き手が一緒になってお互いに自分が忘れていた記憶を引き出し合ったり、相手の記憶が自分の記憶と少しずつ交わり合っていくような、そんな印象を受けました。そういう

経験をすることで、小金井という町のことももっともっと好きになっていく。記憶って、決して一人で作られるものではないんですね。

それを造形や映像、音楽や演劇といったように、作品として表現することもできるのですが、今回の「想起の遠足」では、実際に町に出てじっくり歩いてみることにしました。その人が語る“現地”——つまりその人の記憶と密接に結びついたその場所を、その人と一緒に訪ね歩いてみよう、というのが今回の“遠足”です。実際にはいつもと同じ町を歩くことになるでしょう。でも“誰かの記憶”を通していつもの町を歩いてみると、いつもとは違った発見があるかもしれない。それを楽しんでほしい。そういう遠足の企画を公募したところ、小金井市の内外の多くの方が、自分の記憶や思いを語るユニークな“遠足”を企画してくれました。

“遠足”に出かけるにあたり、誰かほかの人の思い出を聞いたり、その人の記憶と自分の記憶が交わり合うって、どういうことなんだろう？ それによって自分は何か変わるのかな？ と、そんなことを高橋さんと話してみたいと思います。高橋さんは、かつて国策としてハンセン病患者を香川県の離島に隔離した「国立療養所大島青松園」に通い、いろんなかたちで島の記憶を残すアート活動をしておられます。高橋さんにとっても、大島の人たちは想像もできないような経験をされてきた人たちです。高橋さんは彼らとどのように出会い、どんなふうにコミュニケーションし、どんなふうにその記憶を受け取ってきたのか、今日はそんな話をうかがいたいと



▲昭和 30 年代の大島青松園

思います。

高橋●地元の名古屋では、この 15 年ほど病院を舞台に、患者さんやそこで働く人たちに発信するアート、「やさしい美術プロジェクト」を、名古屋造形大学の学生と一緒に続けてきました。“やさしい美術”といっても、単純に病院らしい美術をめざすということではなくて、その現場だからこそ生まれるようなアートの在り方を探求するものです。ですから必ずしも作品の形をとっているものばかりではなく、「一月に一度、ただひたすらその病院に通い続ける」というような“行為”も含まれています。結

果として作品ができてくる場合も、まさにそこにいる方々との関わりを創ることを大切にしてきました。

このように名古屋を拠点としながら、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」をはじめとして、全国各地でプロジェクトを展開しています。国立療養所青松園との出会いは、2010 年にスタートした「瀬戸内国際芸術祭」がきっかけでした。ディレクターである北川フラムさんから大島を舞台の一つにしたいと話があり、開催の数年前から調査に入りました。昨年で 3 回を数えた芸術祭では、元療養所の一角にカフェを開設したり、かつて入所者（ハンセン病を患い入所した方々）が暮らしていた寮を会場とし、島の歴史や入所者の記憶や体験を伝える展示を行っています。

■“モノ”をきっかけに、記憶が紡ぎ出される

高橋●今でも月に 1、2 度は大島に通っているのですが、とはいえ、まだ知らないこと、わからないことだらけです。元ハンセン病患者を描いた映画「あん」（河瀬直美監督作品）が 2015 年に公開されたこともあり、ここにはハンセン病について関心がお



▲現在の大島。中央に見える仏塔は納骨堂



▲やさしい美術プロジェクトがオープンした「カフェ・シヨル」。入所者のみなさんと語らう。

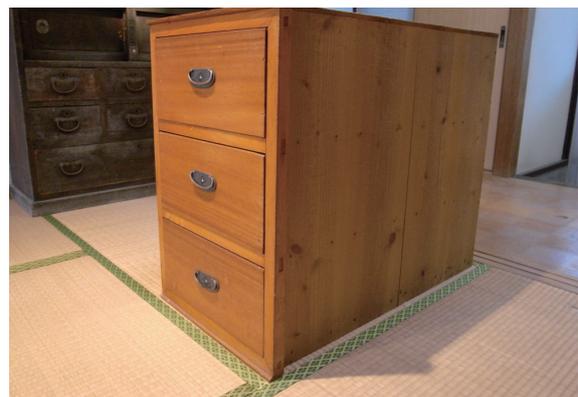
ありの方もいるかもしれません。ハンセン病は有史以来不治の病と恐れられ、ことに日本では国によって隔離政策が行われ、1909年に開所した大島青松園は、全国13カ所ある国立療養所の一つです。高松港から沖へ約8kmほどの、唯一離島にある療養所です。一般には誤った政策を行った「国」と、強制的に隔離収容された「患者」との相対する構造がクローズアップされがちですが、実際に大島に渡ると、そこには一人ひとりの人生があるわけです。戦後特効薬による完治への道が開かれ、1996年にはハンセン病患者を隔離するらい予防法が廃止されました。ハンセン病をめぐる問題は決して終わってなく、今でも患者家族の被害などの問題があります。後遺症が重く、入所時に故郷とは縁が切れたなどの理由で退所しない、できない方も多く、2017年5

月現在、大島には58名の方々が暮らしています。いずれも80歳前後のご高齢です。

今はみなさんはハンセン病が完治して穏やかに暮らしていますが、隔離政策下では、患者と職員の居住区域の間に有刺鉄線が張られ、職員は患者の住まいに土足で上がり込むこともあったと聞きます。差別や偏見から家族や親族を守るために、故郷では亡くなったことになっている方もいます。そのようにして、最も大切な繋がりを絶たれ、この小さな島に50年も60年も暮らしてきたんですね。島では土木作業や重症患者の看護など、過酷な労働が強いられるとともに断種手術や墮胎も行われ、結婚は認められても子孫を残すことは認められませんでした。ですからこの島には、未来につながる“家族”がな



▲入所した際に携えたトランク



▲大島筆筒



▲高橋さんが預かり集めた大島の日用品

いんですね。大島には、故郷に帰ることなくここで一生を終えた2000人以上のお骨を納める納骨堂があります。

そのように生き抜いてこられた方々とどう向き合ったらいいのか…。僕はまず毎月一度は大島に通うことにして、カメラを担いで写真を撮りながら、ブラブラすること——まさに遠足ですよ（笑）、そんなところから始めました。最初は道端で出会ってあいさつする程度だったのが、そのうち「あんた、最近よく見かけるな」と話しかけられるようになり、1年半もすると「一杯やるか？」と誘ってもらえるようになりました。そこから一気にお近づきになった感じです。

そうしたお酒の席で、「島に残るものが何かありますか？」と聞くと、みなさん一様に「何もない」とおっしゃる。誰に聞いてもそう言うわけです。じゃあ聞き方を変えて、「島の中に古いものや、捨てられないで手元にあるものって、何かありますか？」と訊ねると、かつてあった島の楽団で仲間が吹いたというハーモニカや、後遺症で手の感覚をなくした人が素手で触らないように、手づくりで木の取っ手を取りつけた七輪、愉しんで飼った野鳥のための手づくりの鳥籠などなど、いろんなものが出てきまし

た。なかには、療養所に入所した時に携えてきたトランクも、捨てられないで取ってありました。

ここで暮らす方々が高齢を向かえ周辺を整理される時に、僕がそうした身のまわりのものを集めていると聞きつけて少しずつ預けてくれるようになり、亡くなった方の遺品を預かることも増えていきました。たとえばこれは、「大島筆筒」と呼ばれる大島独特のタンスで、入所者の手づくりです。24畳の部屋に12人が暮らしていた寮で、つまり与えられたスペースは1人2畳分と小さな押し入れ、その押し入れに収まるようにつくった大島筆筒の中に、生活のいっさいがっさいが入っていた。こうしてそ



▲遺品のそろばん

ここで暮らしていくためにこつこつつくったモノ、あたりまえに身のまわりにあったモノから、その人の思い出が語られるケースが多かったですね。

アサダ●やっぱり具体的なモノは、会話がひろがるきっかけになりますか？

高橋●はい、実物を目の前にすると、聞きたいことがいっぱい出てきますね。このタンスに使ってある杉の板が、「これ、張り合わせでつくられていますね」と言うと、つくった本人の目がキラッと光る（笑）。アサダ●よくぞそこに気がついた、と……（笑）。

高橋●「その板は米をこう練って、俺たちが張り合わせたんじゃない」と、その一部始終を生き生きと語ってくれる。それが聞いている僕もうれしくてたまらない。そんなことも、モノを通して分かち合えるようになってきた。

たとえばこれは何かわかりますか？ 塑像をつくる時に粘土を掻くヘラに似ていますが、じつは手の感覚をなくした患者さんたちが服のボタンをかけるとき使った器具で、針金を曲げて自作したものです。今はボタンがなくてもマジックテープとか便利なものがありますが、昔は手が不自由な方が常にこれを携帯して、自分でボタンをかけていたわけです。ハンセン病ゆえに必要に迫られた日用品ですから、他



▲解剖台を引き上げ、設置する様子

人にはあまり見られたくない道具かもしれません。大島で暮らしてきたある方から誘われて畑でししとうの収穫を手伝っていた時、その方が畑から掘り出してくれたのがこれでした。どうやら使わなくなってその畑にぼいと捨てたボタンかけを、僕と畑に入って思い出を話している間に、ふと思い出したんでしょね。いったんは捨てて、忘れていたモノが、その人の記憶のなかに戻ってきた、というわけです。



▲海岸に打ち捨てられた解剖台



▲瀬戸内国際芸術祭で公開された解剖台

このボタンかけは僕の宝物でいつも身につけて歩いています。

療養所では自ら命を絶つ人も多かったと聞きました。そうした方々の遺品が、——たとえばこのソロバンもそうですが——親しき友人を経て僕の手元に届くこともあります。ほんとうにちょっとしたきっかけで、しまい込んでいたモノやそれにまつわる記憶は、鮮明によみがえってくるものなんですね。

大島では短歌を詠むことも広く行われていて、すぐれた短歌を残した歌人も多くいました。みなさんはそれを「趣味」と言いますが、人生のすべてを賭けていたような感じがあって、彼らが長年にわたって療養所の先輩から後輩へと受け継ぎながら集めた本も、今もたくさん残っています。歌集ばかりではなく、哲学から数学などのさまざまな書籍の隙間に、昭和6年に入所した方の、歌を綴った手書きの日記が残されていました。そこには、患者でありながら療養所の医師の解剖に立ち会った体験など、療養所の知られざる生活が克明に記されていました。そういうモノを発見し接する機会授かるようになっていきました。

■「わかった」とは言えなくても、何かを感じ取っている

高橋●こうしたモノを通して、この島で暮らした人たちの記憶が、少しずつ僕のなかに染み込んでくるような体験を重ねていきました。残された日記をひも解くことで、今は使われることのない「貯水池」のことや、現在大島に暮らしている人も戦中戦前にまでさかのぼることになり、会話の端々にそれらの記憶の欠片がこぼれて、島の方から驚かれたこともありました（笑）。でも、僕がそれを知っているということが、みなさんはなんだかうれしそうなんです。でもほら「今の私たちにとって、大島はこうだよ……」と、そこからまた話が始まって、ふくらんでいく。ディティールが見えてくるというか、今を生きている“彩り”が見えてくるんですね。

そんな集まってくる話から、使われなくなって海岸にうち捨てられていたコンクリートの解剖台があることを聞きつけ、僕が海岸から引き上げようと提案し、なんとその1週間後には大島の方々が協力して引き上げました。こうした経緯ののち、この解剖台は瀬戸内国際芸術祭で展示しました。

アサダ●島の人とのコミュニケーションだけではなく、そこで見つけたり感じたりしたことを芸術祭で展示するというこの間には、何か違いはありましたか？

高橋●幸いだったのは、アーティストとして“何かをつくるため”ではなく、まず島やそこに住む人た

ちと向き合うことから始められたことです。ある時、島そのものがもうすでに“表現している”と感じられて、その時から、アーティストとして何かをつくり何かを付け足す必要なんてないんだと思うようになりました。島の人が「何もないよ」というこの島には、じつはすごくたくさんの“生きた証”がある。それを外に伝える媒介者になればいいんだ、と……。

もちろん、「部外者のお前なんかになんか分かるか」と叱られたこともありましたが、「これ以上われわれの生活に入ってくるな」というメッセージでもあったかもしれません。その積み重ねのなかで、この島で生きてきた“生”を、この島で表現したいと思ったわけですね。ですから僕自身がつくった“作品”はひとつ一つもない。芸術祭では、そういうプロジェクトになりました。

あえて捨てた解剖台を海から引き上げて展示することへの賛否両論はあって、その答えは今も見つからないのですが、引き上げる決断をした大島の方々の思いは、そこに強く存在したわけです。今は亡くなられた当時の自治会長も、「放っておけない」とおっしゃっていました。それは確かに、この島で生きてきた“証”のひとつなのだと思います。

アサダ●国立の療養所として島の公的な記録やいろんな客観的な記述は残されているかもしれませんが、さきほど“彩り”と表現されたように、個人の体験に基づく主観的でより感覚的な話や、強い思いを見たり聞いたりすることによって、モノクロームだった歴史が一挙にカラーに見えてくる気がします。単に事実を知るよりも、その個人が体験した感覚まで含めて、もっとディティールに入り込んでいく感じですね。

高橋●島に行く前に資料で調べた時には、島の成り立ちや歴史が頭ではわかった気になっていて、僕の人生とは遠い、僕の想像もつかないような体験をしてきた人たちが住む島だと思いました。でも実際に島を訪れてみると、そこにはごく普通のおじいさんおばあさんがいて、それがちょっとうれしかった。

でも、みなさんと僕の人生はまったく異なっていて、そこはどうしても埋められない距離も現実としてある。にもかかわらず、大島のみなさんは僕に話し続けてくれるわけですね。僕がわかっているかわかってなくても、やっぱり語りかける。島を訪れるたびに親近感と疎外感が交互にやってくる感じで、僕は島に通い続ける。そんなことを通じて、常に

揺さぶられながらも、ちょっとずつその間は近づいてきたような気がしています。それは単純に“記憶を共有する”ということではない、何かではないか。人と人が近づくと、どんなこと？ と問い続けるようなことでもあったと思います。

引き上げられた解剖台に、ここで一緒に暮らしてきた仲間の遺体を洗った記憶を語った方もいました。その思いや感触はもちろん“わかる”とは簡単に言えないけれど、でも想像することを諦めず受け止めていく感じはしています。そういう時間を経ることで距離感もお互いに変わっていき、話しやすい、聞きやすい関係が生まれてきたように思います。

■誰かの記憶が自分に染み込んでくる、という体験

アサダ●小金井を舞台とした「想起の遠足」と、今高橋さんのお話にあった香川県の隔離施設での経験、そしてそれと向き合ってきた高橋さんの経験とは、時代も地理的・歴史的背景もかなり異なっていますが、“誰かの記憶と向き合う”という意味では、同じことのように思います。その人の記憶を聞きながら、それをずっと消化しようと努力し続ける。あるいは消化しきれないまま、それでもなお付き合い続けて、その人の記憶を聞き続ける……、そんな感じなんですか。

高橋●そうですね、僕はそのことが、自分自身が生きていくうえでとても重要だと感じています。だから自分のためなんですね（笑）。時にはわからなくて叱られることもあります。大島のみなさんと話すこと、その記憶と向き合うことは、僕が生きるうえで大きな支えになってるような気がします。自分が生き長らえるための糧となっている。そういう思いがありますね。

アサダ●今回、自分の記憶に基づく遠足を企画されたみなさんはどう感じていますか？

男性 A ●「想起の遠足」は僕のための企画であり、今日の高橋さんのお話は、僕のためのお話のように思われました（笑）。というのも、僕も2カ月間閉鎖病棟に過ごした経験があるからです。場所もまさに高松で、そこで5年働いて精神的な疲れが出たのか、名古屋に転勤して1年もしないうちに発症して、閉鎖病棟に入りました。今から10年ほど前、僕が30歳くらいの時のことです。

それは自分の記憶であるわけですが、今の高橋さんのお話は、自分のそうした記憶とダブらせながら

うかがっていました。高橋さんがおっしゃったように、自分の記憶との向き合い方にしろ、大島の方々の記憶との向き合い方にしろ、そこに答えはなくてもいいのかもしれませんが。たとえばこうしたアートプロジェクトで作品をつくるのも、それが答えではなくて、わからなくても付き合い続けるということが大切なんだな、と思いました。

アサダ●みなさんは、たとえば懐かしくなったりして、かつて通っていた学校のような特定の場所にわざわざ行って見たような経験はありますか？ そういうことって、どんな時にしたくなるんでしょうか？

男性B●僕の場合は、通っていた小学校がなくなっちゃったから、ですかね。古い木造の校舎で、今でもたまにそこに行くことがあります。

アサダ●今はもうなくなってしまった場所、ですね。確認として、ですか？

男性B●どうでしょう。残しておけば良かったのに、という感じでしょうか。時々行きたくなりますよね。景色も良いし……。

女性C●引っ越しをしたり、ひとり暮らしを始めた時に、自分の最初の家のあった場所に行ったことがあります。そのあたりを歩いてみると、当時自分が考えていたことなどが思い出されて、ああ、ガンバっていたんだとか、あの頃はつらかったな、とか……。でもそれは全部、今の自分につながっているんだと感じられました。

アサダ●今の自分とつながっている感じ、ですか……。「いつかの通学路」という遠足を企画された[D]さんは、いかがですか？

女性D●自分が通っていた小学校に、結婚後、主人を連れて行ったことがあります。私にとっては小学校時代がいちばん楽しくて、6年間、良い思い出しかない。だから主人を連れて行った。でも、中学と高校は楽しくなかったのを連れて行きませんでした(笑)。

アサダ●ご主人はどんな反応でした？

女性D●へえーって感じですかね(笑)。私が楽しくて、満足しただけかも。

アサダ●高橋さんは、大島の歴史や隔離患者の想いを伝えるためというよりも、まず自分のために話をうかがっているとおっしゃいましたが、それが自分の記憶にも作用してくるという経験はありますか？

高橋●ああ、ありますね。入所者のみなさんは故郷(ふるさと)をあとにして、その後は故郷との関

係を絶って、あるいは絶たれてこの島で50年以上の月日を暮らしました。その後隔離政策が廃止され久し振りに故郷に帰ってみると、そこには自分の家もないし、思い描いていた風景がどこにもなかったと話されていました。でも逆に言えば、みなさんは心に、故郷のイメージを記憶として非常にしっかりとっているんですね。

ところが僕は、山を切り崩して造成された新興の住宅地で生まれ育ったせいか、故郷という感覚があまりないんです。いつもブルドーザーが地面を削り、どんどん町がつくられていくような、それはそれで僕の前風景なのでしょうけれど、それが故郷かと言われると、どうもピンとこない。ですから島のみなさんがとても大切にしている故郷という感覚は、僕にはまったくないものでした。僕は高島のみなさんと出会って、「故郷って大切なものなのかなあ」と、漠然とでも考えるようになった気がします。

■記憶とアイデンティティは、深いところできっとつながっている

アサダ●僕も大阪のニュータウン育ちなので、その感じ、よくわかります。でも2年ほど前に『表現のたね』(モ・クシュラ、2015年)という本を書いて、自分が表現者になるうとしたきっかけを過去にさかのぼりながら探した時、それは故郷の記憶を読み替えるという作業だったような気がします。それまでは「故郷に愛着なんてないよ」と思っていたけれど(笑)、実家もそこにあり、何度も足を運んでかつての通学路などをたどり直してみた時に、改めてそこで遊んだ記憶や、一緒にいた友だちのことなどが思い出されました。そんなことを書き留めたり、もう一度同じことをしてみると、「僕はかつてここにいたんだな」という思いが、どんどんと厚みを増していくように感じられました。それを“故郷”という言葉で回収できるかどうかはわかりませんが、当時無意識にやっていたことを、そういうかたちで再確認したことで、僕のなかの故郷を後から再編集できたような気がします。

自分の記憶を、自分で養うって感じでしょうか。大人になっても、というか、大人になったからこそ、そういうこともできるんだな、と……。

高橋●僕にも、ブルドーザーが均していく造成地を捉え直す機会がありました。砂漠のような一見不毛なその風景は、じつは僕にとって重要だったかもし

れないと、記憶のなかのその置き所を少し変えてみようとしたこともありました。

切り崩されて均されてしまったなかには、「山賊峠」というすごい名前の峠もありました（笑）。子ども心にドキドキしながら歩いた記憶があります。それが失われた時、当時はそんなに気にも留めていなかったけれども、こうして記憶から引っ張り出してきて、今みなさんにその話ができるだけでも、ちょっとうれしいものなんです（笑）。

アサダ●記憶から引っ張り出すたびに、組み換えが起こったり、位置づけが変わりますよね。いろんな人と出会ったり話したりすることでも、記憶は変わっていく。そういう感覚をもった人はいらっしゃるのでしょうか？

女性C●子どもの頃の私を知っている人から、当時の私のことを聞いたりすると、違った視点から自分を見ることができたような気がしますね。

男性E●僕は10歳まで山口県に生まれ育ち、その後群馬県に移り住んだのですが、自分は西日本の人間か東日本の人間か、とても悩んでいます（笑）。高校野球などではことさら東西対決をあおったりしますが、僕はどちらを応援するべきか……、と。でもふと気がつくと、東日本に移り住んで20年以上経つのに西日本を応援していたりするわけです。でもほんとうは自然に東を応援できなければいけないのではないかとまた悩むわけです。

たとえばワールドカップでは、ごく自然に日本を応援できるのに、東日本だと自然に応援できない。もし山口県と群馬県が対決したら、僕はどちらを応援することになるんでしょう……。

アサダ●ねじれてますねえ（笑）。でも記憶とアイデンティティはきつとつながっていて、いろんなことは自然に今ある日常になじんでいったとしても、時間が経っても、どうしても揺らがない感覚もきつとあるんでしょうね。

男性F●ために、今度は山口県ではない西日本に引っ越してみるのも面白いかもしれませんね（笑）。

アサダ●あつという間に時間が経ってしまいましたが、これから「夜遠足」として少しみんなで町を歩いてみます。いつもと同じ景色かもしれないけれども、みんなで歩いて、思いを語り合うことで、いつもと違った何かが見えてくればいいな、と思います。高橋さん、最後に「想起の遠足」に応援のメッセージをいただけますか。

高橋●記憶って特別なものじゃなくて、僕たちの身

のまわりにたくさんあることです。それが、ちょっとした人と人との間柄（あいだがら）のなかでやり取りされるわけです。そこで生まれるつながりは、ヒモでつながるような感じじゃなくて、自分の記憶とどこかで触れ合う、響き合うような“小さな奇跡”が起こる、そんな予感に満ちたものです。もちろんそれに反応できるような、心の準備運動もたぶん必要なんじゃないかな。今回の“遠足”が、そうした“小さな奇跡”のきっかけとなってくれることを期待しています。

アサダ●今日はどうもありがとうございました。